

この10年間のアメリカの大学図書館の目録

大城善盛(京都外国語大学)

私は1969～77年の8年間、ミシガン大学図書館で日本関係資料のカタログーとして勤務した。昨年(1987年)3か月間研修のためアメリカへ行き、20近い大学及び公共の図書館を見る機会を得た。そして、大学図書館の目録はこの10年間に大きな変化を遂げているように思われた。その印象を以下に紹介したい。

私が勤務していた1970年代前半はOCLCが軌道に乗り始め、オハイオ州内の図書館だけでなく、州外の図書館も利用可能(メンバーになること)となった時代であった。ミシガン大学図書館も遅まきながらメンバーとなることを決めていた。しかし、個々の図書館単位ではなく、グループ単位の加入を要求されて、ミシガン州内の図書館もミシガン・コンソーシアムなるものを設立し、ミシガン大学をはじめ、ミシガン州立大学、ミシガン州立図書館、ウェイン州立大学などもメンバーになったように記憶している。すなわち、1970年代前半はOCLCを基盤に、オンラインによる分担目録作成が大学図書館に導入され始めた時代である。

私が帰国する直前の1975～76年頃のミシガン大学図書館では、3～4人の目録係がOCLCのオリエンテーションやワークショップを受けてきて、館内の他の職員には研修の形でオンライン・カタログングのデモンストレーションをしてみせたりしていた。OCLCは漢字を含む東アジア関係の資料の目録は対象にしておらず、目録係ではあっても直接的には私の仕事とは何ら関係はなかった。しかし、当時からOCLCは大きな話題となっていたので、私もデモンストレーションを見たり、又わざわざ休暇をとってオハイオ州までOCLCの本拠を見に出かけたりした。OCLCの担当者から分担目録の思想の説明をうけたり、デモを見たり、印刷カードの見本をもらったりして、大きな感激を受けたのを今でも憶えている。

昨年、10年ぶりに再度OCLCを訪問した。場所も変わり、大きな建物のなかに最新のコンピュータがぎっしり並んでいて、そして千人近い職員がいると聞いて、又感激を新たにした。しかし、もう一つびっくりしたことがあった。文献を

通して理解するアメリカの大学図書館の目録はオンライン化に向かっているような印象を与える。ややもすると、オンライン目録（OPAC）が一般化しているような印象さえ与える。OCLCに関しても、オンライン目録やCONSERプロジェクト、オンラインILLシステムやCJKシステムの開発などがニュースとなってわが国に流れてくる。しかし、OCLCの主要業務が10年前と同じ分担目録作成による目録カードの生産だと聞いて2度びっくりしたのである。それが示唆するのは、今でも目録はカード形態で維持している大学図書館が結構あるということである。私が見学した10余の大学図書館の中で、過半数の図書館は未だカード目録であった。

今回の主な研修地であったボストン市にあるシモンズ大学の図書館・情報学部は全米でも10指に入るほど有名で、特に情報学に強い。そのため、渡米する前は図書館もオンライン化されているだろうとバラ色の夢を描いていた。しかし、その期待はみごとに裏切られた。シモンズ大学には4千人近い学生（学部2千人、大学院2千人）が在籍し、特に学部は女性のみが入学を許可されている女子大学である。その図書館は約20万冊の蔵書と約1,500点の雑誌（現在講読中のもののみ）を所蔵し、年間の資料費は約35万ドル（約5千万円）で4割強を雑誌購入に当てている。

この図書館のキカイ化といえば、OCLCに参加してオンラインで目録作成をしているだけで、パソコンによる貸出業務のキカイ化を検討中ということであった。近くにある大体同規模の女子大学エマニエル大学やウィーロック大学なども似たような状況であった。その他の見学した大学図書館も含めて言えることは、オンラインによる分担目録作成は一般化しているが、オンライン目録は未だ一部の図書館の占有物だということである。

ボストン滞在中に市周辺のいくつかの大学を見学した。Boston Univ., Boston Coll., Northeastern Univ., Univ. of Mass. at Boston, MIT, Harvard Univ. である。

5百万冊の蔵書を誇るボストン公共図書館がマイクロフィッシュ形態の目録を維持しているのに対し、上記のいずれの大学図書館にもマイクロ形態の目録はなかった。最初に訪問したBoston Univ.は3万人近い学生が在籍し、図書館の蔵書も約150万冊ある規模的には大きい方に入る私立大学である。そこの図書館はCARLYLE SYSTEM INC. のTOMUS（The Online Multiple User System）というシステムを導入し、端末7台を於いて本年（1987年）からオンライン化（OPAC化）していた。しかし、図書のみが入力されており、雑誌やA-V資料などの書誌情

報は全然入っていないので、カード目録と併存という形をとっていた。コンピュータ化が最も進んでいると言われているオハイオ州立大学、ノースウェスタン大学など一部の図書館を除けば、このBoston Univ.のオンライン目録とカード目録の併存、そして商用システム（もしくは、NOTISのような商用以外の外部システム）を導入してのオンライン化というのが、アメリカの大学図書館のキカイ化の一般的在り方のように思えた。

Boston Univ.がボストン市内にあるのに対し、Boston Coll.は近郊のChesnut Hillという市にあり、学生数約1万5千人、図書館の蔵書約百万冊のアメリカでは中規模のカトリック系の私立大学である。このBoston Coll.で私はアメリカで初めてカードレス目録、すなわちすべての資料の書誌情報がオンライン化されている図書館を見た。端末が10数台置いてある目録コーナーが入口近くにあるレファレンス・コーナーの横手にあり、検索の指導はレファレンス部の担当となっている。3～4階の書庫の角々など端末は目録コーナー以外にも利用者が必要になりそうなあらゆる所に置いてあり、全部で30台近く置いてあるということであった。Boston Coll.はGeacのシステムを導入して20年前からキカイ化を始め、最近やっとカードレスになったようである。

わが国でも金沢工業大学、京都産業大学の図書館がカードレス目録を維持しており、それらを見ているが、端末の台数の多さと利用度の高さには驚かされた。似たような情景をノースウェスタン大学、オハイオ州立大学の図書館でも見た。

漢字処理なども含めて考慮すると、目録の機械化の技術はわが国が進んでいるという感じもするが、わが国では技術が先行して利用指導が疎かになっており、又目録の質を大きく左右する件名もわが国ではおろそかになっており、検索ツールとしては未だアメリカの目録の方に一日の長があるように思える。

とにかく、今回の研修で感じたことは、期待していた以上にオンライン化は進んでなくて、カード目録を維持している大学図書館が割と多かったことである。しかし、10年前と比べると、オンライン・カタログは一般化しており、目録形態としてはオンライン目録、オンラインとカードの併存目録、カード目録と3種にばらついてはいるが、ゆっくりとオンライン化の方向に進んでいることは感じとれた。

(昭和63年2月22日 受理)

拡大運営委員会を開催

文責 石井敦

本会が発足してから、早くも6年目に入ろうとしている。しかし、当初の予測と現時点での状況にはかなりのズレがあるのではないかと、この問題提起をうけ、会の今後の在り方を検討するため、3月11日午後4時から12日午前中まで、神奈川県葉山町の衆議院共済組合葉山保養所で、拡大運営委員会を開催した。出席者は、第一回以来の新旧運営委員のうち、下記の14名であった。会議には多くの貴重な意見が出されたが、ここには到底掲載しきれないため、以下に要点のみを列挙する。

冒頭、本会発足時に討論された日本図書館学会の一分科会とする問題が検討されたが、これまでの活動状況からみて(たとえ70%が学会員であっても)、独立した活動の意義が十分あると確認された。ただ、この5年間、予想以上の会員数の増加があったため、会の運営が繁多となり、やや息切れの感がある。そこで、発足時の思想に戻り、運営を形式ばらず、実質本位に、スリムにすることが了承された。

1. 運営委員会：委員会の開催回数を減らし(できれば委員数も)、編集・研究両委員会の独自性に任せる。

2. 機関誌『図書館史研究』：販売状況は、1号-853冊、2号-677、3号-591、4号-530(1988年3月10日現在)で、かなりの数と評価できる。これには、発売元の日外アソシエーツの販売努力も多としなければならない。今後は無理に特集をくむことなく、会員の自由投稿を中心に編集をすすめたい。

3. 研究セミナー：過去5回開催、毎回50名前後の参加者があり、充実した研究討論が行われ、好評であるが、毎年開催するのは研究委員会の重荷になっている。そこで、これまでのような外部参加のセミナーは隔年とし、関東、関西、名古屋が順次引き受ける。その間の年は、場所のみ研究委員会が設定して、自由討論会とする。ただし、出席者は必ず10分間程度の研究報告を行う。本年度は奥泉と石井の両名が担当する。

4. ニュースレター：順調に発行され、評判もよい。現状通り年5回発行を維持したいが、オーバー・ワークならば年4回にする。原稿の収集は、関東、名古屋、関西の各責任者が引き受ける。

5. 会費：機関誌代も含めた年会費3,000～3,500円にという案が出されたが、機関誌は自由に購入してもらうことで、現状に据え置くことにした。

6. 事務局：現事務局の梅花女子大学も3年を経過、そろそろ限界にきたので、来年1月より図書館情報大学で引き受けてもらうことになった。

出席 石井 敦、宇治郷毅、奥泉和久、加藤三郎、河井弘志、川崎良孝、阪田蓉子、寺田光孝、天満隆之輔、常盤繁、中林隆明、馬場俊明、藤野幸雄、油井澄子

— 昭和62年度事業報告 —

1. 第5回「図書館史を考えるセミナー」の開催
昭和62年9月6日(日), 7日の両日, 東洋大学にて開催. 参加者は44名.
2. 図書館史研究会 ニュースレターの発行
 1. 第25号ニュースレター 昭和62年2月25日
 2. 第26号ニュースレター 昭和62年5月10日
 3. 第27号ニュースレター 昭和62年7月1日
 4. 第28号ニュースレター 昭和62年9月20日
 5. 第29号ニュースレター 昭和62年11月10日
3. 機関誌『図書館史研究』(第4号)の刊行
昭和62年9月 日外アソシエーツから発売
4. IFLA図書館史Round Table へ本会会員名簿(有志のみ)送付: 昭和62年12月
5. 運営委員会の開催
 1. 第20回運営委員会 昭和62年4月10日 東京 新宿
 2. 第21回運営委員会 昭和62年6月24日 東京 新宿
 3. 第22回運営委員会 昭和62年9月6日 東京 東洋大学
 4. 第23回運営委員会 昭和62年10月10日 東京 法政大学
 5. 第24回運営委員会 昭和62年12月4日 東京 お茶の水

— 昭和63年度事業計画 —

1. 第6回「図書館史を考えるセミナー」の開催 夏期, 関東, 二日間
2. 図書館史研究会 ニュースレターの発行 5回程度
3. 機関誌『図書館史研究』(第5号)の刊行
4. 4月中旬, 西ドイツでの図書館史シンポジウムに, 津田純子, 川崎良孝の2名が共著論文を送付

事務局より 1.

2. 勤務先変更

3. 在外研究

4. 本年度会費未納の会員は納入をお願いします

5. 会員名簿をつけましたが, 一部重複があります. ご了解ください.